

日蓮遺文「南部六郎三郎殿御返事」小考

前川 健 一

一 はじめに

「南部六郎三郎殿御返事」(文永十年八月三日)⁽¹⁾は「波木井三郎殿御返事」とも称され、いわゆる『縮刷遺文』以来、日興写本を底本として各種遺文集に収録されている。⁽²⁾しかし、刊本録外には日興写本と同系統の「南部六郎三郎殿御返事」の他に、文章表記を異にする「波木井三郎殿御返事」が収録されており、さらに本抄の一部を抄出した「波木井三郎殿御返事」が2篇収録されている。本稿では、これら諸本を比較検討し、併せて、本抄の対告衆である「南部六郎三郎」についても検討したいと思う。

二 「南部六郎三郎殿御返事」の諸本

以下、目録などの記載をも含め、諸本を列挙する。

【目録】

①日意「大聖人御筆目録」「録外御書註文」の項「波木井三郎殿」「南

部六郎殿御返事(重本アリ)。(定本二七四四頁)。

【写本】

②日興本。⁽³⁾重須本門寺藏。「南部六郎三郎殿御返事」。漢文体。
③日順本。重須本門寺藏。「波木井三郎殿御返事」。漢文体。凶録「日蓮聖人の世界」一〇六頁に末尾二紙の画像あり。興風談所「御書システム」で異同が確認できる。

④本満寺本(一)。第十九冊「波木井三郎殿御消息」。カナ交じり。

⑤本満寺本(二)。第十五冊「御消息(波木井三郎殿御返事)」。カナ交じり。抄出本。

(以下、筆者未見)

⑥日朝本。合本第十冊。「御消息」。

⑦三宝寺本。第十九冊「南部六郎三郎殿御返事」「波木井三郎殿御返事」(定本二七九二頁)。⁽⁵⁾

⑧妙覚寺本(一)。⁽⁶⁾

⑨妙覚寺本(二)。⁽⁷⁾第十一冊(録外(二)に相当)。第十四冊(録外(三)に相当)。

⑩日健本。「御書十一帖」の内。「波木井三郎殿御書」。

【刊本】

⑪他受用御書。第五卷「波木井三郎殿御返事」。カナ交じり。本満

寺本(一)と小異。

⑫ 録外(一)。第二四卷「波木井三郎殿御返事」。カナ交じり。本満寺本(一)とよく一致。

⑬ 録外(二)。第十卷「南部六郎三郎殿御返事」。漢文体。日興本と比較すると脱文・省略がある。

⑭ 録外(三)。第十三卷「波木井三郎殿御返事」。カナ交じり。抄出本。
⑮ 録外(四)。第二三卷「波木井三郎殿御返事」。カナ交じり。抄出本。

本抄の本文系統は、大きく分けると、漢文体のものとカナ交じりのものとに分かれ、さらにカナ交じりのものの中には、抄出本が含まれる。

おおまかな傾向として、漢文体のものは「南部六郎三郎殿御返事」の表題を持ち、カナ交じりのは「波木井三郎殿御返事」の表題を持つ。筆者未見だが、おそらく三宝寺本も同様であろうと推測される(ただし、日興本は漢文体だが、「波木井三郎殿御返事」。本満寺本(一)は、表題は「波木井三郎殿御返事」だが、末尾の宛名は「波木井三郎殿 御返事／南部六郎殿在土左国御年五十二」とあり、波木井三郎と南部六郎を併記している)。抄出本は、いづれも同文で、「仏(ケ)不軽品」(8)「是(ヲ)可疑申耶」(9)の部分抄出したものである。

三 漢文体諸本と和文体諸本との関係

本文の類似性によって、以下の四系統に分類される。

I 漢文体 日興本・日順本・録外(二)

日蓮遺文「南部六郎三郎殿御返事」小考(前 川)

II カナ交じり 本満寺(一)・録外(一)

III カナ交じり 他受用御書

IV カナ交じり 本満寺本(二)・録外(三)・録外(四)

ここで問題になるのは、漢文体と和文体(カナ交じり)のうち、どちらが日蓮が書いた原型に近いかという点である。通例、日蓮が和文体で書いたものが伝写過程で漢文化されることが多い。また、通説のように宛先の「南部六郎三郎」を南部(波木井)六郎実長とすると、実長が漢文体書簡をもちょうような教養を有していたかという問題がある。日蓮門下で漢文体書簡を受け取っているのは、富木常忍など文筆官僚に属する人々である。一方、実長宛てとされる日蓮書簡は(10)いづれも和文体である(ただし、真蹟現存のものはない)。また、実長自筆文書は幾つか現存するが、いづれも仮名の多い和文体である(11)。つまり、日蓮遺文書写の一般的傾向から考えても、実長への書簡であるという想定からも、和文体が本来の形態で、それが漢文化されたという可能性が出てくる。

しかし、結論として言えば、漢文体のものが本来の形態であったと考える良いと思われる。

第一には、日興本の存在である。近年、日興写本として伝承されてきたものについて疑義が出される場合もある(12)ので、慎重な検討が必要であるが、本書については筆跡の上から日興による書写と見られている(13)。しかも、日興本では欽明天皇

のことを「銀明」と表記している（定本七四八頁⁽¹⁴⁾。日順本・録外（二）は「欽明」）。これは、日蓮特有の誤字であり、しかも後年には正しく「欽明」と記されるようになるものである⁽¹⁵⁾。つまり、「日興本」は真蹟に忠実に「銀明」と記したのであり、それ以外の箇所についても同様の信憑性を見込んでよいと思われる。

第二に、本書の内容からの推定である。本書の冒頭には以下のような文がある。

鳥跡飛来、晴不審、疾風卷重雲、如向明月。但此法門、当世人不論上下、難取信心。其故修行仏法、現世安穩、後生善処等云云。而日蓮法師雖称法華經行者、多留難。当知、不叶仏意歟等云云（定本七四五。録外（二）は冒頭から「難取信心。其故」までを欠く）。

日蓮を「日蓮法師」と呼んでいることや、「晴不審」と言っていることから、この文は「南部六郎三郎」から日蓮へ宛てた書簡を引用していると考えられる。書簡を「鳥跡」と称していることや、「疾風卷重雲、如向明月」といった修辭から見て、「南部六郎三郎」からの書簡そのものが漢文で記されていたと考えるべきだろう。つまり、「南部六郎三郎」自身が漢文体書簡を日蓮に送っているわけで、そのような人物に対して漢文体書簡を返信するのは、ごく自然なことであろう。以上のように、本抄が本来漢文体であったとすると、なぜ和文体の「波木井三郎殿御返事」が成立したのかが問題とな

る。日順本は漢文体であるが、「波木井三郎殿御返事」と題されているので、「南部六郎三郎」が「波木井三郎」に書き替えられるという段階があり、その後、和文体のものが作られたと推測される（和文体のものは全て「波木井三郎」宛て）。日意の『御筆目録』では「波木井三郎殿」と「南部六郎殿御返事」とがあり、後者には「重本アリ」との註が付されているので、日意が録外御書を収集した段階では、和文体の「波木井三郎殿御返事」と漢文体の「南部六郎三郎殿御返事」の両方が流通していたのであろう。

漢文体から和文体が作成されたということを直接的に立証することは難しいが、以下のような箇所は漢文からの読み下しによって成立したのではないかと疑われる。

日興本・日順本「勸厲末法初」（定本七四七。録外（二）はこの部分を欠く）
本満寺本（一）「末法（ノ）初（メヲ）勸（ス、メ）ハケマシ給（フ）」
他受用「末法（ノ）初（ヲ）勸（メ）厲（ハケマ）（シ）給（フ）」
録外（一）「末法ノ初ヲ勸メハケマシ給（フ）」

この場合、「すすめはげます」は和語的な表現ではなく、「勸厲」を読み下した結果、成立した表現と推定される。

また、漢文体「南部六郎三郎殿御書」と和文体「波木井三郎殿御書」とを比較すると、引用文などで和文体の方が詳細になっている箇所が見られる。

日興本・日順本「有一闍提作羅漢像住於空処乃至諸凡夫人」(定本七四五)

録外(二)「有一闍提作羅漢像乃至諸凡夫人」

本満寺本(一)・他受用・録外(一)「有一闍提作羅漢像住於空閑処誹謗方等大乘經典諸凡夫人」

日興本・日順本・録外(二)「正像稍過已末法太有近」(定本七四八)

本満寺本(一)・他受用・録外(一)「正像稍過已末法太有近法華一乘機今正是其時」

この場合、和文体にする際に引用文を付加した可能性も指摘できよう。

なお、日興本には、末尾に次の一文がある。

始書云。鎌倉筑後房弁阿闍梨大進阿闍梨申小僧等有之。召之、可有御尊。可御談義。大事法門等、粗申彼等。日本未流布大法少々有之。随御学門、可注申也(定本七四五頁)

これは、もとの真蹟では追伸として冒頭に記されていたものを、書写の際に末尾に移動したものである。日興本を除く諸本が、この一文を脱落させているのが、意図的なものであるのか、単なる偶然であるかは分からない。

四 本抄の対告衆について

以上のように、漢文体の本文が本抄の本来の形態であったとすると、本抄の宛先を通説のように波木井六郎実長とする

ことには少なからぬ問題がある。既に述べたように、実長にそのような漢文能力があったか疑問だからである。

そもそも「南部六郎三郎」という名は、普通に考えれば、南部六郎の三男のことである。南部六郎すなわち波木井六郎が実長であるので、南部六郎三郎は実長の三男と考えるのが自然である。実長は本来彦三郎ないし三郎であるが、後に六郎と称したので、六郎三郎とも言う⁽¹⁶⁾ という解釈もあるが、これは「南部六郎三郎殿御返事」が実長宛てであるという予断にもとづくもので、十分な根拠がないし、中世における名乗りの一般的準則から逸脱している。日興が著した「弟子分本尊目録」(永仁六年)には波木井実長(南部六郎入道)とは別に「甲斐国南部六郎三郎」(日興上人全集二二四頁)とあるので、この人物を本抄の宛先として良いと考えられる。実長の子息で「六郎三郎」と言えば、実氏である⁽¹⁷⁾。実氏は常陸隠井(加倉井)に移って加倉井氏の祖となり、波木井郷に土着した長義流波木井氏とは交渉がなくなった⁽¹⁸⁾ので、後代には「南部六郎三郎」が誰か分からなくなり、「波木井三郎」が宛名とされるようになったのではなからうか。「波木井三郎」であれば、南部彦三郎と称していた実長と解することも出来るが、本来の宛名は日興本のとおり「南部六郎三郎」であり、虚心に考えれば、これは実長ではあり得ない⁽¹⁹⁾。本抄の内容や南部(波木井)氏と日蓮との関係は、本抄が実長宛てではな

いということ踏まえて再検討されるべきである。

- 1 諸本とも同じ年時であり、異説はない。
- 2 ただし、題号はいづれも「波木井三郎殿御返事」。
- 3 興風談所「御書システム」の翻刻により、立正大学日蓮教学研究所所蔵の写真で本文を確認した。
- 4 池田令道「身延文庫蔵 日朝本録内・録外御書の考察」、『興風』二一・三一九頁。なお、同論文によると日朝本の奥書には「本云御年五十二於佐渡国御書札ト見タリ」とある由であり、本満寺本(一)と同様の本を祖本としていると推測される。
- 5 高木豊「『録外』遺文に関する書誌学的覚書」、同著『中世日蓮教団史攷』三五七頁。
- 6 高木前掲三六一頁。
- 7 冠賢一「日蓮遺文『録外御書』の書誌学的考察」、高木豊・冠賢一編『日蓮とその教団』六頁。
- 8 以下、写本・版本を引用する場合、() は送り仮名、() は振り仮名を表す。
- 9 日興本では、以下の箇所当たる。「仏不軽品引自身過去現証云爾時有一菩薩名常輕等云々。又云悪口罵詈等。又云或以杖木瓦石而打擲之等云々。釈尊引載我因位所行勸厲末法始。不軽菩薩既為法華經蒙杖木忽登妙覺極位。日蓮此經之故現身被刀杖二度當遠流。当来妙果可疑之乎」(定本七四六〜七四七頁)。
- 10 定本番号にしたがって挙げると以下のようになる。
六八「六郎恒長後消息」(和文。本満寺録外「念仏無間地獄事」・三宝寺録外「謗法墮獄抄」)。
八〇「南部六郎殿御書」(和文。延山録外、現在は所在不明)。
一二七「波木井三郎殿御返事」(本抄)。
- 四一六「地引御書」(和文。身延曾存。日朝本・平賀本。刊本録内第四十卷)
- 四三三「波木井殿御報」(和文。日興代筆本、身延曾存。日朝本録内補欠・平賀本・日意本。刊本録内第三三卷)。
- 四三四「波木井殿御書」(和文。日朝本・本満寺録外・三宝寺録外・妙覚寺本(一))。他受用御書。刊本録外第二五卷。ただし内容的に偽書とされる)。
- 11 西山本門寺所蔵波木井実長(日円)自筆書状五通。本書状については、池田令道「無年号文書・波木井日円状の系年について」、『興風』十一参照。なお、陸奥遠野南部文書には「日円甲斐身延四至指写」(鎌倉遺文一八九四五)・「日円置文写」(同一八九四六)があるが、いづれも平仮名の多い和文である。
- 12 菅原関道「重須本門寺蔵の『頼基陳状』両写本について」、『興風』十五。小林正博「大石寺蔵日興写本の研究」、『東洋哲学研究所紀要』二四。坂井法暉「日興写本をめぐる諸問題について」、『興風』二二。
- 13 坂井上掲論文、二三五頁。
- 14 ただし、定本の脚注には記載がない。
- 15 小林正博・若江賢三両氏よりご教示いただいた。真蹟における「銀明」「欽明」を列挙すると以下のようになる(係年は定本のもの。括弧内は、定本頁数/真蹟集成巻数・頁数)。
安国論御勸由來(文永五年)「銀明天皇」(四二二/二・三九)。
神国王御書(文永十二年)「欽明天皇」(八七八/三・六六)。
撰時抄(建治元年)「銀明天皇」「銀明の子」(一〇一四/一・九五)。「銀明より」(一〇二六/一・一九)。「銀明より」(一〇四八/一・一五八)。
- 国府尼御前御書(建治元年)「銀明天王」(一〇六三/二・

二四八)。

和漢王代記(建治二年)「第三十欽明天皇」「欽明天皇」(二三五一／三・二九八)。「自欽明」「自欽明」(二三五二／三・三〇〇)。

四信五品抄(建治三年)「欽明の時時」(二二九九／一・二二〇)。
治病大小権実違目(弘安元年)「欽明天皇」(一五二〇／三・三三)。

千日尼御前御返事(弘安元年)「欽明天皇」(一五三九／三・四一)。

随自意御書(弘安元年)「銀明天皇」「銀明より」(一六一五／九・一七八)。

諫曉八幡抄(弘安三年)「欽明天皇」(一八三八／九・二〇三)。
断簡二八四(三論宗御書)「欽明御宇」「欽明天皇」「欽明天皇御宇」(二九六六／九・一九二)。

もし日蓮が「銀明」が誤記であることに気付き「欽明」という正しい表記をするようになったとすると、『神国王御書』『随自意御書』の系年には問題があるということになる。岡元鍊城『日蓮聖人遺文研究』第二卷「Ⅱ 日蓮聖人書状『神国王御書』の研究」その系年と対告衆については、『神国王御書』の内容から建治三年という系年を提唱しているが、「銀明」「欽明」の問題には触れていない。

16 立正大学日蓮教学研究所編『日蓮聖人遺文辞典(歴史編)』「波木井実長」の項(宮崎英修執筆)など。以下、南部(波木井)氏については、宮崎英修『波木井南部氏事跡考』、特に一〇五～一三五頁。

17 宮崎英修「波木井殿御報「常陸の湯」について」、『大崎学報』一二五・一二六合併号・一四二頁。

18 宮崎上掲論文、一四三～一四四頁。

日蓮遺文「南部六郎三郎殿御返事」小考(前川)

19 実長の父・光行は三郎を名乗っているのですが、実長自身が六郎三郎を名乗ることはあり得ない。

※重須本門寺蔵日興写本については、立正大学日蓮教学研究所のご好意により架蔵写真を閲覧させていただきました。記して感謝申し上げます。

〈キーワード〉 日蓮、日興、波木井氏、波木井実長、南部実氏
(国際日本文化研究センター共同研究員・博士(文学))

掲載されなかった諸氏の発表題目(三)

日蓮の仏教観

北川 前肇(立正大学教授)

日蓮の親子観

— 孝養・報恩の説示を中心に —

高森 大乘(立正大学講師)

『立正安国論』に関する一考察

都守 基一(立正大学日蓮教学研究所研究員)